

株式会社 福田屋呉服店

1868年(明治元年)創業

明治の幕開けとともに創業し、以来141年。福田屋呉服店は常に時代とともに歩み続けてきました。今も、着物の登竜門「ゲートウェイショップ」としてトレンドの中心にある同店を訪ね、社長の佐々木英典氏に話をうかがいました。

高望みせず、課題は潜在ニーズの顕在化

七五三の時期が終わると(株)福田屋呉服店のショーウィンドウには成人式向けの華やかな振袖がディスプレイされ、店内には個性的なデザインの和装小物が並びます。ヒール草履やバッグ、髪飾りなど他では滅多に見かけないような和装小物を求める若い女性たちにとって、同店は福田屋呉服店という老舗ではなく、「しやなりさん」と呼ばれるおしゃれなきものショップ。プラリと立ち寄る女性客も多く、店内は活気に満ちています。

同店の創業は明治元年。喜連川町鷺宿で初代馬場内文吉氏が農業のかたわら「福田屋」の屋号で古着商を始め、明治13年頃に二代目が宇都宮の寺町に店舗を構えました。現在の場所(旧宮島町)に移転したのは明治32年頃。三代目が時代に先駆けて現金正札販売を断行して信用を得て古着商から呉服商へと転身した後、商勢を広めたのは四代目庫蔵氏です。いち早く洋服部を設立したり、関東大震災時には布団を大量に仕入れて東京へ出向くなど、その商機をつかむ勘の鋭さは業界でも評判だったとか。

昭和46年からは六代目の佐々木光俊氏(現会長)の時代。着物を

まとって歩く女性の姿をイメージさせる「しやなり福田屋」に店名を変更し、カフェやフォトスタジオを別部門として設立するなど、その先見性は誰もが認めるところで。光俊氏は振袖を戦略商品に全国専門店の組織化にも尽力し、平成18年に新たな時代に対応できる力を備えた長男の佐々木英

典氏にバトンを渡しました。そして今、時代のトレンドを読んで新たなビジネスモデルを構築していく七代目英典氏の経営手腕が各界から注目されています。

こうして141年の歴史を振り返ってみると、代々の店主が時代の流れを敏感に捉え、工夫をしながら事業を盛り立ててきたことがよく分かります。勘や商才だけではなく、仕事に対する真つ直ぐな気持ちや、ときに英断を怖れない大胆さ、リーダーとしての牽引力、そのすべてが英典氏に受け継がれているのかも知れません。

「今後、着物業界は決して右肩上がりにはなりません、なくなることもないと考えています。着物が好きか嫌いかと尋ねれば、多くの女性が好きと答えます。潜在ニーズは必ずあるはず。独りよがりではなく問題を一つずつ掘り起こし、潜在ニーズを顕在化するのが私の仕事。まだまだチャンスはあると思います」とすでに次世代への継承を頭に描きながら、着実に歩を進めています。その経営ポリシー



戦前の店舗。屋上にはシンボルマークとして福助の看板が掲げられていた



「しやなり」の看板は、近日リニューアルの予定

株式会社
福田屋呉服店

宇都宮市大通り 1-1-19

☎028-622-4329(代)

〈URL〉

(楽天市場店)

<http://www.rakuten.ne.jp/gold/shanari/>

※このコーナーは隔月で掲載します。

代表取締役 佐々木英典氏。
百貨店のアパレル専門フロアをイメージしたという
店舗内は華やかな雰囲気。

